

イメージで教える日本語の格助詞

杉村 泰

1. はじめに

本稿は日本語の格助詞を認知的イメージで教える方法について論じたものである。この方法によれば、学習者は格助詞の多様な意味役割を意味的ネットワークで理解できるため、機械的な暗記に比べて記憶に負担がかからなくてすむという利点がある。

- (1) *日本で[に]は色々な外国から来た食べ物があります。(学習者の作文)
- (2) *有害物質ダイオキシンなどが発生し、住民の健康を損なうことで世界中に[で]問題になっているが、(後略)。(学習者の作文)

以下、「に」「から」「へ」「まで」「で」「と」の6つの格助詞を対象に、各格助詞の意味の違いについて見ていく。

2. 本稿の立場

一般に異なる形式の格助詞に同一の意味役割が与えられることがある。その場合、格助詞を入れ替えても真理的価値に変化はないとされる。

- (3) a. このお菓子は牛乳で作った。 原材料
b. このお菓子は牛乳から作った。 原材料
- (4) a. 生活苦で夜逃げした。 原因
b. 生活苦から夜逃げした。 原因

これに対し山梨(1994)は、「この種のパラフレーズの関係にある格助詞が、意味的にみて厳密に同値であるわけではない。一見したところ同値に見える格助詞も、その表現主体の主観的な視点を反映している」と論じている。本稿で

は格助詞の各意味役割は、中核となるプロトタイプの意味から様々に派生して現れたものであると考える。

3. 格助詞のプロトタイプの意味

3.1 「に」の意味

一般に格助詞「に」には多くの意味役割が付与されている。しかし、これらは全て 着点 という一つのプロトタイプの意味に還元することができる。この点について、国広(1986)は「「に」は一方向性を持った動きと、その動きの結果密着する対象物あるいは目的の全体を本来現わしている」と主張し、堀川(1988)も「密着の対象を表わす」と規定し、山梨(1994)もプロトタイプの「に」には「収斂性、到達性、密着性、近接性」の制約があると指摘している。本稿で特に強調したいのは、「に」によってマークされる対象は話し手によって「点」として認知されたものであるということである。これは「で」が領域として認知されるのと対照的な特徴である。

さて、格助詞「に」には大きく分けて、存在の場所・時点、一方向性を持った動きの着点、被動的行為の動作主、の3つの用法がある。このうちには次のようなものがある。

- (5) a. 机の上に本がある/ない。 存在の場所(位置)
- b. 私に子供がある。 所有者
- c. 姉にバイオリンが弾ける。 能力の主体
- d. 今日は10時に寝る。 時間(時点)
- e. わが家は学校に近い。 距離的な位置

まず、(5a)の「に」は 存在の場所(位置) という空間の一点を表すのに使われている。続く(5b)(5c)の「に」も、広い意味で「子供」や「バイオリンを弾く能力」の存在する場所を表しており、(5a)の「に」の派生として考えることができる。(5d)の「に」も空間を時間に置き換えることにより、(5a)の「に」の派生として考えることができる。一方、(5e)の「に」は主体と対象の 距離的な位置 を表している。これは動きこそ伴わないものの一方向性を備えている点で、次の と連続している。

には次のように多種多様のものが含まれる。

- (6) a. 机の上に本を乗せる/並べる。 位置変化の着点

- b. 映画館に行く。 移動の着点
- c. 映画を見に行く。 目的
- d. 社会人になる。 変化の結果
- e. 社長に会う/話す。 行為の相手
- f. 学生に教える。 働きかけの対象
- g. 友達に本をあげる/私に本をくれる。 受益者
- h. 友達に本を買ってあげる/私に本を買ってくれる。 受益者
- i. 太郎は次郎に比べて背が高い。 比較の基準
- j. 彼に恋をする。 精神的行為の相手
- k. 彼について行く。 随伴の対象
- l. 政府は構造改革に取り組んでいる。 行為の対象

これらは一見雑多なものの集合のように見える。しかし、各意味役割を抽象化していくと、いずれも何らかの行為の結果の及ぶ 着点 を表していることに気付く。本稿ではこの 着点 を格助詞「に」のプロトタイプ的意味であると考え（図1）。図1において矢印は何らかの動きを表し、右端の点は行為の結果の及ぶ 着点 を表している。

[図1] 「に」のプロトタイプ的意味



これに対し、先の(5a)~(5d)は矢印で示された動きが感じられない。しかし、これらも「一方向性を持った動き」の部分が背景化し、「密着の対象」を前面に押し出した表現であると考えれば、図1の範疇で考えることができる¹⁾。

一方、 の「に」については、述語動詞の動きの向きが と逆になるため注意が必要である。

- (7) a. 犯人に殺される。 受身の対象
- b. 友達に本をもらう。 授与者
- c. 友達に本を買ってもらう。 授与者
- d. 台風に家を飛ばされる。 原因

たとえば、「~にあげる」と「~にもらう」とでは物の移動が逆に向かう。

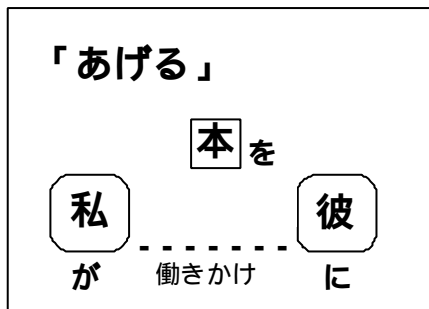
そのため、城田（1993）のように前者の「に」を受け手、後者の「に」を
でどころと別々に扱う考え方もある。しかし、このように考えると(8b)と(9)
の区別ができなくなる。

- (8) a. 私は友達に本をあげる。（受益者） [本：私 友達]
 b. 私は友達に本をもらう。（授与者） [本：私 友達]
 (9) 私は友達から本をもらう。（授与者） [本：私 友達]

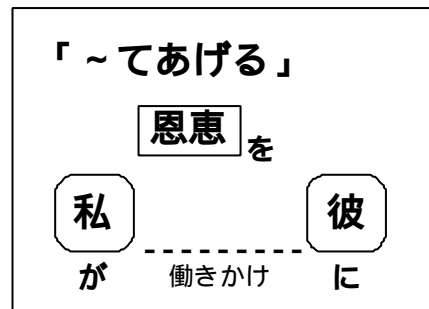
たしかに、(8b)の「友達」は本の移動の起点には違いない。しかし、それを「友
達から」ではなく「友達に」と表現したのは、話し手がそれを 起点 ではな
く別のものとして認知したからにほかならない。堀川（1988）はこうした「に」
について、「相手としての意味役割を持ち、主語が、相手に対して何らかの働
きかけをすることが意味される。ここでいう働きかけとは、相手の好意を求め
る気持ち、相手の意志を動かそうとする気持ちが相手に向かって働くことであ
る」と説明している。本稿でもこの「に」は密着の 着点 を表すと考える。

ここで授受表現のヴォイスを図 2～図 7 に示す。これらの図において、太い
矢印は物や恩恵の流れる向きを表し、細い矢印は働きかけや密着性の方向を表
している。

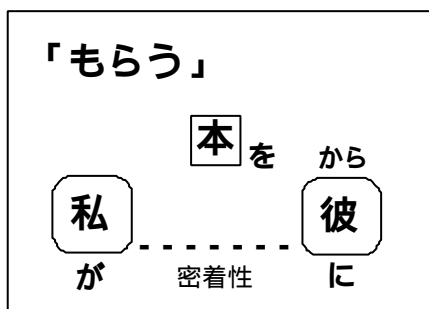
[図 2] 私が彼に本をあげる



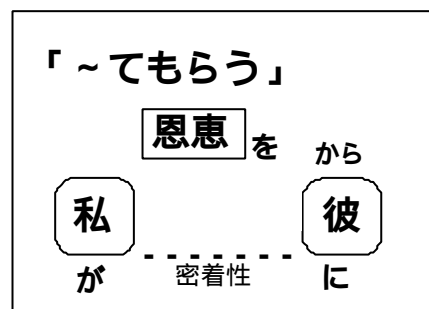
[図 3] 私が彼に～をしてあげる



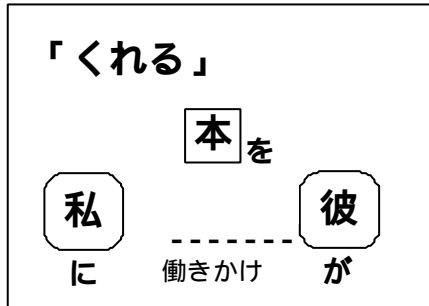
[図 4] 私が彼に/から本をもらう



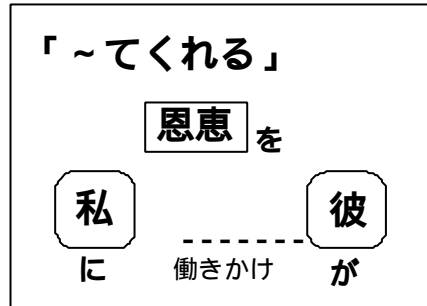
[図 5] 私が彼に/から～をしてもらう



[図 6] 彼が私に本をくれる



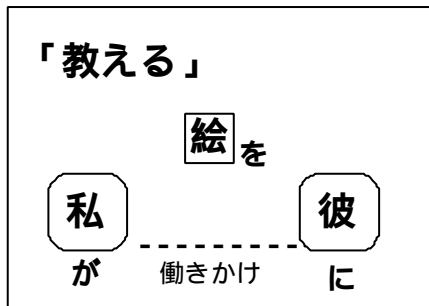
[図 7] 彼が私に～をしてくれる



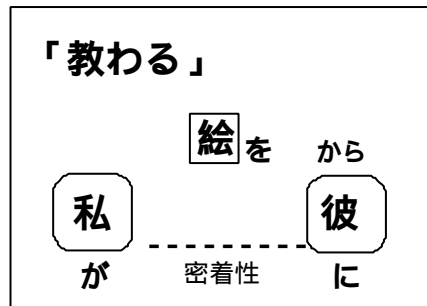
同様に(10)においても、太い矢印は物や恩恵の流れる向きを表し、細い矢印は働きかけや密着性の方向を表している。「教わる」、「借りる」はたとえ主体にその意志があっても、相手が「教える」、「貸す」という行為をしてくれないければ事態は成立しないため、行為の主導権は相手にあると考えられる。そのため、事態を成立させるためには主体が相手に密着する必要がある。この密着を表すのが「に」の働きであると考えられる(図8～図11)。

- (10) a. 彼に教える/貸す。
- b. 彼{に/から}教わる/借りる。

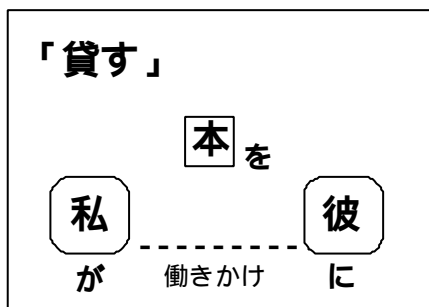
[図 8] 私が彼に絵を教える



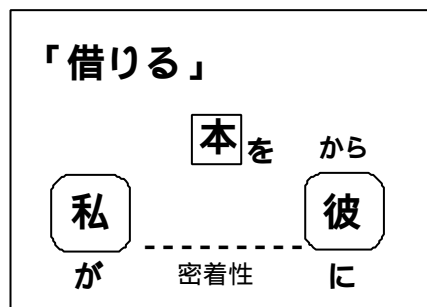
[図 9] 私が彼に/から絵を教わる



[図 10] 私が彼に本を貸す



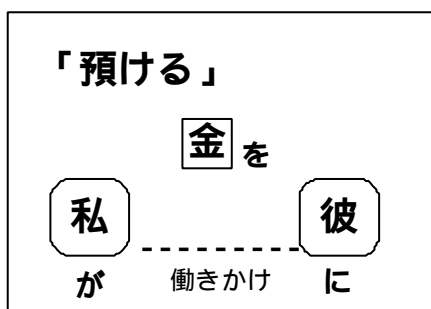
[図 11] 私が彼に/から本を借りる



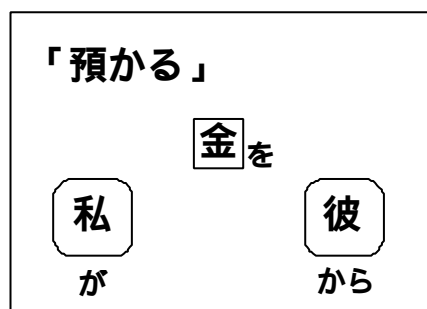
一方、同じように物が主体に渡る表現であっても、「預かる」、「買う」は「に格」を取らない²⁾。これは、「教わる」、「借りる」が相手に主導権のある行為であるのに対し、「預かる」、「買う」は行為の主体に主導権のある行為であることを意味している。すなわち、「預かる」、「買う」はいくら相手が「預けよう」、「売ろう」と思っても、主体が「預かる」、「買う」という行為をしなければ成立しない事態である。これらの表現が密着の対象を必要としないのは、このような理由によると考えられる(図12~図15)。

- (11) a. 彼に預ける/売る。
 b. 彼{ *に/から }預かる/買う。

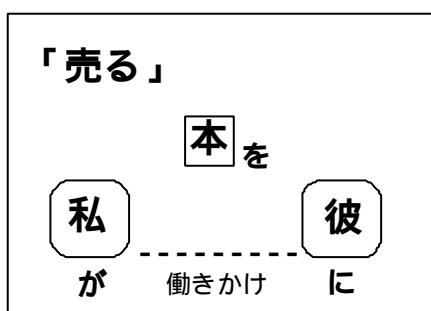
[図12] 私が彼に金を預ける



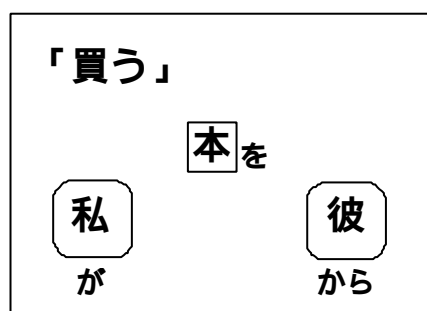
[図13] 私が彼から金を預かる



[図14] 私が彼に本を売る

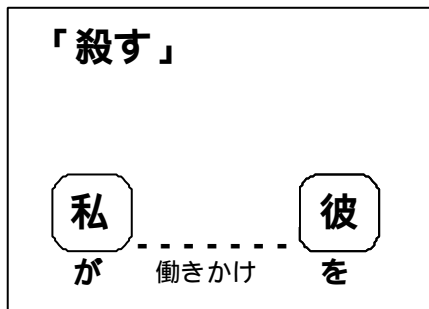


[図15] 私が彼から金を買う

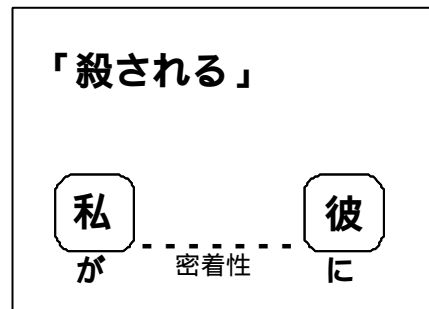


ところで、(7a)の 受身の対象 には主体から相手への働きかけがあまり感じられないかもしれない。しかし、これも「に」が密着の対象を表すことから説明できる。すなわち、「殺される」は相手の「殺す」という行為なくしては成立しない事態であり、事態成立の主導権は主体ではなく相手にある。そのため、事態が成立するためには主体と相手が近づかなければならない。この相手への密着を表すのが「に」である。次に、「殺す」に関連する表現について、そのヴォイスを図で表す(図16~図17)。

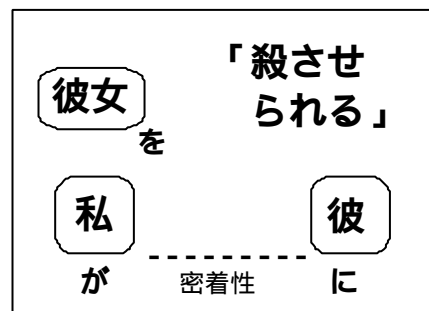
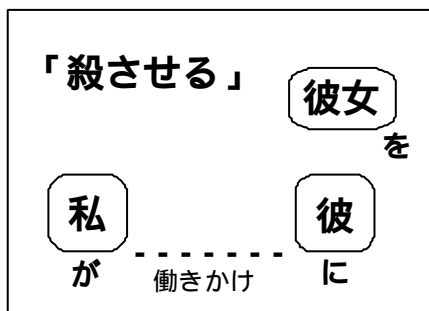
[図 16] 他動詞 (私が彼を殺す)



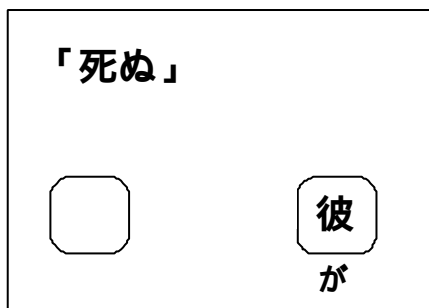
[図 17] 他動詞の受身 (私が彼に殺される)



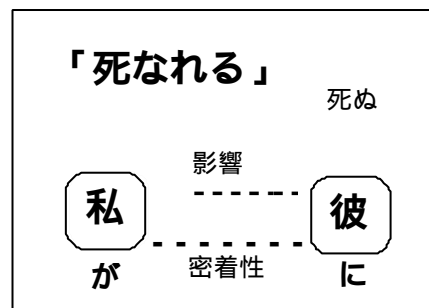
[図 18] 使役 (私が彼に彼女を殺させる) [図 19] 使役受身 (私が彼に彼女を殺させられる)



[図 20] 自動詞 (彼が死ぬ)



[図 21] 自動詞の受身 (私が彼に死なれる)



残る(7d)の 原因 も相手が人間でなく自然現象であるという点を除き、(7a)と同様に考えることができる³⁾。

3.2 「から」の意味

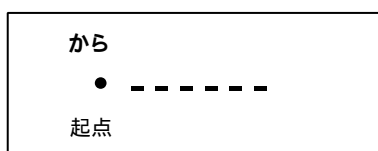
格助詞「から」には次のような意味役割がある。いずれも何らかの 起点を表す点で共通している。

- (12) a. アメリカから来た。 空間的な起点
- b. 社長から社員に説明する。 動作主
- c. 一番の学生から順番に発表する。 順序

- d. 昨日の10時から寝つづけている。 時間的な起点
- e. 友達から本をもらう。 授与者
- f. 友達から本を買ってもらう。 授与者
- g. わが家は学校から近い。 距離的な位置
- h. このお菓子は牛乳から作った。 原材料
- i. 生活苦から夜逃げした。 原因

本稿ではこの 起点 を格助詞「から」のプロトタイプの意味であると考え（図 22）。図 22 において左端の点は何らかの動きの 起点 を表し、矢印はそれが及ぶ方向を表している。

[図 22] 「から」のプロトタイプの意味



このうち注意を要するのは(12e)~(12i)である。まず、(12e)(12f)の「から」は「に」との使い分けが問題となる。日本語教育では「~にもらう」と「~からもらう」をパラフレーズに説明することがある⁴⁾。しかし、このように説明すると「てもらう」構文における「に」と「から」の文法性の違いが説明できなくなる。これに対し、「から」と「に」を区別して考えると、「Xから」はXが物や情報の出どころとなる場合にのみ使われることが説明可能となる。

- (13) a. 私は彼{に/から}送って(貸して/言って/教えて)もらった。
- b. 私は彼{に/*から}掃除して(借りて/書いて/会って)もらった。

次に(12g)の 距離的な位置 について考える。同じ遠近を表す表現であっても、「近い」が「に」と「から」の両方と共起するのに対し、「遠い」は「から」としか共起しない。

- (14) a. わが家は学校{に/から}近い。
- b. わが家は学校{*に/から}遠い。

まず、(14a)は、「わが家は学校に近い」が「わが家」を起点とし「学校」を着点としたイメージで述べた表現であるのに対し、「わが家は学校から近い」は「学校」を起点とし「わが家」を着点としたイメージで述べた表現であると

いう違いがある。両者は話し手の視点の違いを表している。一方、(14b)の「遠い」は「から」としか共起しないため、常に「学校」を起点としたイメージで述べられていることが分かる⁵⁾。

残る(12h)の 原材料 と(12i)の 原因 は、「で」との使い分けが問題となる。これらも「から」が 起点 を表すのに対し、「で」は 背景的な側面の提示 を表すという違いから説明できる。

- (15) a. このお菓子は牛乳から作った。
 b. このお菓子は牛乳で作った。
 (16) a. 生活苦から夜逃げした。
 b. 生活苦で夜逃げした。

すなわち、「から」が「牛乳 お菓子」「生活苦 夜逃げ」のように「原因 結果」のイメージで捉えているのに対し、「で」は「牛乳」や「生活苦」を「お菓子」や「夜逃げ」の成立する背景的要因として捉えているのである。

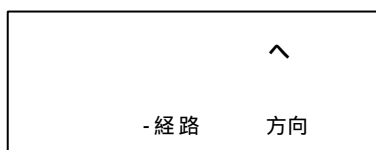
3.3 「へ」の意味

格助詞「へ」には次のような意味役割がある。いずれも何らかの 方向 を表す点で共通している。

- (17) a. 東京へ行く。 移動の着点
 b. 北へ向かう。 方向
 c. 先生へ手紙を出す。 相手先
 d. 近代社会へ成長する。 変化の結果

本稿ではこの 方向 を格助詞「へ」のプロトタイプの意味であると考え(図 23)。図 23 において矢印は何らかの動きの及ぶ 方向 を表している。「に」の場合と違い矢印が実線で示されているのは、「へ」が経路を重視した表現であることを強調するためである。

[図 23] 「へ」のプロトタイプの意味



「へ」は移動や変化の着点を表す「に」と近い関係にある。そのため、「へ」は「に」で置き換えられることが少なくない。しかし、「へ」が「先生への手紙」「近代社会へと成長する」のように「への」「へと」という言い方ができるのに対し、「に」は「*先生にの手紙」「?近代社会にと成長する」のような言い方ができない(しにくい)といった違いがある。

また、次の表現を比較すると、「へ」の場合はホタルが向こうへ飛んでいく様子がイメージされるのに対し、「に」の場合はそうした経路や方向性は感じられず、ホタルはすでに向こうにいるイメージとなる。

- (18) a. ホタルが向こうへちらほら。
b. ホタルが向こうにちらほら。

次の(19)も「へ」を使うと「走り」が今の状態から一歩先へと進んでいく様子がイメージされるのに対し、「に」を使うと一足飛びに一歩先に達している様子がイメージされる。(20)も同様である。

- (19) a. 走りも、一歩先へ(日産自動車「プリメーラ」、テレビCM)
b. 走りも、一歩先に
(20) a. すこやかを、あなたへ(中外製薬「グロンサン」、車内広告)
b. すこやかを、あなたに

こうした「へ」の特徴は、格助詞で終わる表現に端的に現れる。たとえば、次の(21)(22)の「へ」は「に」で置き換えられないわけではないが、「へ」の方がずっとすわりがいい。これは李(2002)も論じているように、「へ」には移動を具体的な映像で描く効果があるためである。

- (21) 虹の翼、北へ南へ。(日本エアーシステム、地下鉄構内の看板)
(22) より高く、より楽しく、21世紀へ。(南知多ビーチランド、車内広告)

また、李(2002)の指摘にあるように、「へ」は「AからBへ。」という構文で使われることが多い。この構文はAからBへ段階を経て変化していく様子を表している。次の文において各広告主のセールスポイントは、当該の変化への道筋をサポートしていくことにある。こうした場面で「に」よりも「へ」の方が適切な理由は、「に」を使うと一足飛びに目的に達するイメージとなるのに対し、「へ」を使うと途中の変化も意識されるためであると考えられる。

- (23) 「話すだけ」から「いろいろできる」へ。(NTT DoCoMo、車内広告)
- (24) 快適をカタチへ、カタチから空間へ。(ハウトク、事務機のカタログ)
- (25) 知識偏重の教育から、人間性重視の教育へ。(公明党、街頭ポスター)

一方、「に」は「AをBに。」という構文で使われることが多い。

- (26) インド・スリランカに伝わる自然のチカラを今、日本に。(森下仁丹「サラシアダイエット」、新聞広告)
- (27) 社会保障と国民の暮らしを予算の主役に(日本共産党、パンフレット)
- (28) 「安全」と「快適」をかたちに。(東海理化「トリエパオパポシリーズ」〔チャイルドシート〕、車内広告)
- (29) こころを、ちからに(あいち福祉専門学校、車内広告)

これらは「を格」で示された対象を「に格」で示された状態に変化(位置変化、状態変化)させる様子を表している。このように結果に焦点を当てる場合には、「へ」よりも「に」を使う方が自然である。

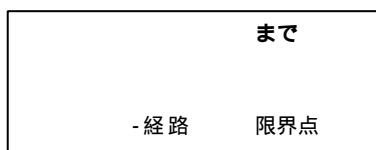
3.4 「まで」の意味

格助詞「まで」には次のような意味役割がある。いずれも何らかの程度の 限界点 を表す点で共通している。

- (30) a. マラソンでゴールまで走った。 移動の終点
- b. 明日は 10時まで寝る。 時間的な終点。
- c. バーベルを 150 kg まで持ち上げられる。 程度の限界点
- d. 彼は信頼していた友達まで裏切った。 極端な例

本稿ではこの 限界点 を格助詞「まで」のプロトタイプの意味であると考え(図 24)。図 24 において矢印は何らかの動きの及ぶ方向を表し、右端の縦線はそのゴールを表している。「まで」も経路を重視した表現であるため、矢印が実線で示されている。

[図 24] 「まで」のプロトタイプの意味



「まで」と「に」の違いは、「まで」が途中の経路を含んだ表現であるのに

対し、「に」は着点のみに焦点を当てた表現であるという点にある。このことは「走り続ける」のように途中の経路を含む場合には「まで」を使い、「走り込む」のように途中の経路を含まない場合には「に」を使うことから分かる。

- (31) a. マラソンでゴール{まで/*に}走り続けた。
 b. マラソンでゴール{*まで/に}走りこんだ。

したがって、「AからBまで」という表現は 起点 から経路を経て 限界点 まで到達する全ての範囲を覆った表現となる。

- (32) ファッションからグルメまで。(ILYA 本山、街路灯の広告)

3.5 「で」の意味

一般に格助詞「で」には次のように多様な意味役割が与えられている。これらの意味役割から一つの抽象的な意味を求めると、菅井(1997)の定義したように「主格または対格に対する背景的側面の提示」となる。

- (33) a. 机の上で本を乗せる/並べる。 行為の場所
 b. 警察で事件を捜査している。 行為の主体
 c. 今日は 10時間で仕事を終える。 時間(期間)
 d. 今日は 10時で寝る。 時間(期間)
 e. 太郎はクラスで一番背が高い。 比較の基準
 f. 台風で家を飛ばされる。 原因
 g. 三千万円で家を建てる。 様態
 h. 木と紙で家を建てる。 原材料
 i. 金槌と釘で家を建てる。 道具

本稿では菅井(1997)に従って、「で」のプロトタイプの意味を「主格または対格に対する背景的側面をマークする」と考える。以下、この「背景的側面」を簡単に 領域⁶⁾と呼ぶことにする(図25)。

[図25] 「で」のプロトタイプの意味

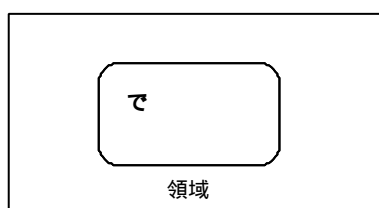
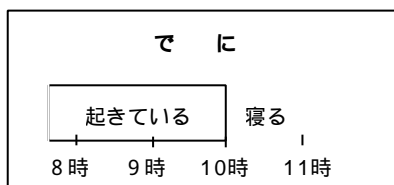


図 25 は矢印で表された何らかの力が、四角で囲まれた 領域 の中で働いているイメージを図式化したものである。これは「に」が対象を点的に捉えるのと対照的な特徴である。そのため、同じ 場所 と言っても、(6a)の「に」が本の移動の着点を表すのに対し、(33a)の「で」は本を乗せる行為の場所を表すといった違いがある。両者の違いは「机の上」を点と捉えるか、平面と捉えるかという話し手の認知の仕方に起因している。同様に(33b)の「警察で」も抽象的な 領域 として考えられる。また、(33c) (33d) の「10 時間で」「10 時で」も、空間的な 領域 から時間的な 領域 への拡張として解釈できる⁷⁾。「10 時で寝る」は「起きているのは 10 時で終わり」という意味であり、寝るまでの時間を 領域 として捉えた表現である(図 26)。

[図 26] 「10 時に寝る」と「10 時で寝る」



同様に(33e)の「太郎はクラスで一番背が高い」も「太郎のクラス」という範囲の中での比較を表した表現であり、 領域 という概念で説明できる⁸⁾。この「で」を「に」と間違える学習者が多いが、 領域 という概念で説明すると理解がしやすくなる。

さらに、(33f)~(33i)の 原因 様態 原材料 道具 も、抽象化すれば事態の背景を表すため 領域 の範疇に入る。ただし、教育の観点からはこれらを 領域 というには抽象的すぎるかもしれない。その場合には、個々に意味役割を教えていくことが必要である。

次に「に」と「で」の微妙な使い分けについて論じる⁹⁾。まず、(34)の「鳴る」は一般には「〔場所〕で」と共起するのが普通である。「空で鐘が鳴る」と言うと、飛行機か何かで鐘を空に持っていき、空中で鐘が鳴っている様子が想像される。これに対し、「空に鐘が鳴る」と言うと、「空に向かって鐘が鳴り響く」の意味で、鐘の音が空高く達する情景が想像される。

(34) おききはるかな空に(/ で) 鐘が鳴る (岩谷時子「旅人よ」)

次の(35)~(38)は眼前の情景を描いた表現である。この場合「で」が動作の行

われる 場所 を表しているのに対し、「に」は動作主体の存在する場所を表しているといった違いがある。「で」を使うと動作主体に共鳴した感じが強くなり、「に」を使うと動作主体から心理的に距離をおいて傍観している感じが強くなる。(39)も見る対象が情景から夢に変わったただけであり、これらの派生として考えられる。

- (35) 淡紅(うすべに)の秋桜(コスモス)が秋の日の何気ない陽溜りに(/で) 揺れている(さだまさし「秋桜」)
- (36) 何かを求めて振り返っても そこに(/で) はただ風が吹いているだけ(北山修「風」)
- (37) 鳥鳴きて木に高く 人は畑に(/で) 麦を踏む(文部省唱歌「冬景色」)
- (38) 松原遠く消ゆるところ 白帆の影は浮ぶ
干網浜に高くして 鷗は低く波に飛ぶ(文部省唱歌「海」)
- (39) 温かな昼下がり通りすぎる雨に濡れることを夢に(/で) 見るよ(石坂浩二「さよならをするために」)

次の(40)~(42)は動作の原因を表したものである。この場合も「で」が事態成立の背景的側面を表しているのに対し、「に」は被動的行為の密着の 着点を表している。

- (40) 風に(/で) ふるえる緑の草原(岩谷時子「旅人よ」)
- (41) 京都大原三千院 恋に(/で) 疲れた女がひとり(永六輔「女ひとり」)
- (42) 雨に(/で) 壊れたベンチには 愛をささやく歌もない(五輪真弓「恋人よ」)

以上の「に」の用法は学習者にとって習得が難しいものである。こうした用法も、プロトタイプの意味で教えると学習者の理解の助けとなる。

3.6 「と」の意味

格助詞「と」には次のような意味役割がある。これに関して森田(1989)は、「本来、異なる存在を合一させるのが「と」の働きである」と説明している。

- (43) a. 社会人となる。 変化の結果
- b. 太郎は次郎と比べて背が高い。 比較の対象
- c. 社長と会う/話す。 行為の相手
- d. 彼と恋をする。 精神的行為の相手
- e. 私は母とハワイに行く 連れ

f. ロミオとジュリエット 並列

本稿では森田（1989）に従って、「と」のプロトタイプの意味は 合一性 と いう概念に集約できると考える。その上で、便宜上これを対立型の 相手 と、 並列型の 連れ とに分けて考えることにする。

[図 27] 「と」のプロトタイプの意味 [図 28] 「と（一緒に）」のプロトタイプの意味



図 27 は「主体」と「相手」がお互いに影響を及ぼし合っているイメージを 図式化したものである。このうち、(43a)の 変化の結果 は、「と」より は、「と」の方が直感に合うように思われる。この「と」は「相手」からの 働きかけが希薄になったもので、「に」に接近した表現である。

(43b)~(43d)の「と」も「に」との置き換えが可能である。これらは、動詞に よってあまり意味の差が出ないものと、大きく意味の変わるものがある。こ れを段階的に並べると次のようになる。

- (44) a. 彼{に/と}似ている。
- b. 彼{に/と}比べる。
- c. 彼{に/と}会う。
- d. 彼{に/と}ぶつかる。
- e. 彼{に/と}話す。
- f. 彼{に/と}相談する。
- g. 彼{に/と}恋をする。
- h. 彼{に/と}キスをする。

(44)において「に」は主体から対象への一方的な行為を表し、「と」は主体と 相手との相互行為を表している。すなわち、「彼に相談する」の「彼」は聞き 役であるが「彼と相談する」の「彼」は聞くだけでなく話もする、「彼に恋を する」は片思いであるが「彼と恋をする」は両思いであり、「彼にキスをする」 は彼の頬に口をつけるが「彼とキスをする」はお互いに口を近づける、といっ た具合である。他の動詞も程度差こそあれこうした違いが繁栄されている（詳 しくは杉村（1999）参照）。

残る(43e)と(43f)の「と」は図 28 で示される。図 28 は主体と相手（連れ）が行動を共にとるイメージを図式化したものである。このうち 連れ の「と」は、「～しあう」という文脈では使われず、「と一緒に」で置き換えられる点で上の「と」から区別される。また、「ロミオとジュリエット」と言えば二人の比重は同じであるが、「ロミオにジュリエット」と言うとロミオが主でジュリエットが副となる。同様に、「ご飯とみそ汁」と言えばご飯とみそ汁が対等に並んだイメージとなるが、「ご飯にみそ汁」と言うと、「ご飯にみそ汁をかける」と同様に、主であるご飯にみそ汁が附随するイメージとなる。

4. まとめ

以上、本稿では格助詞の意味をプロトタイプ的意味に還元して考えることにより、多様な意味役割を意味的ネットワークで捉えられることを指摘した。このように見えてくると、日本語の格助詞は西洋文法でいう格関係を表すだけでなく、広く話し手の事態に対する認知的な把握の仕方を表す表現であることが分かる。従来、述語が格関係を支配すると言われてきたが、上で見た「恋をする」のように、格助詞が述語の意味に影響を与える場合もある。今後はこうした現象について考察を進めていく必要がある。

注

- 1) 杉村（1999：113）では、「「存在」というものを「無」から「有」へ向かっての変化（あるいはその逆）と捉えるならば、これも「一方向性を持った動き」と無関係ではない」と論じた。しかし、これは無理のある考え方であると思われる。現在は図1の矢印に相当する部分を「指差し」のようなものと考えている。
- 2) 「彼に預かる」「彼に買う」という表現は「彼のために」の意味で使われ、「彼」は 好意の受け手 として解釈される。
- 3) 受身の対象 を表す「によって」が「に寄って」とつながっていることも、このことと関係していると考えられる。
- 4) 日本語教科書『CMJ』（p.141）でも、「～に あげる」の「に」は英語の“to”、「～に もらう」の「に」は英語の“from”で説明されている。
- 5) 「遠い」が「に」と共起しない理由については、「に」の持つ「密着性」の意味と関係があると思われる。この点についてはさらに分析を進める必要がある。

- 6) ここでいう 領域 とは、「線」「平面」「立体」の3つを含めたものとする。
- 7) 岩崎(1995)は「二格は二格につく名詞の表す時点を一点で指すのに対し、デ格はデ格につく名詞の表す時点までの経過を含意して達成・到達点として指す」と定義している。
- 8) 「日本で一番」「世界で二人」などの表現も、世界の中で日本だけを範囲にしたものなのか、世界全体を範囲にしたものなのかという 比較の領域 を表していると考えられる。
- 9) 以下の例文中の「(/で)」は杉村の補ったものである。

参考文献

- 岩崎 卓(1995)「二とデ 時を表す格助詞 」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語の格をめぐって』くろしお出版, pp.74-82.
- 国広哲弥(1986)「意味論入門」『日本語学』vol.15-12, pp.194-202.
- 城田 俊(1993)「文法格と副詞格」『日本語の格をめぐって』くろしお出版, pp.67-94.
- 菅井三実(1997)「格助詞「で」の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』127(文学43), pp.23-40.
- 杉村 泰(1999)「認知イメージに基づく格助詞の指導」『日本語学習者の作文コーパス:電子化による共有資源化』平成8年度~10年度科学研究費補助金(基礎研究(A)(1))研究成果報告書(研究課題番号 08558020)研究代表者 大曾美恵子, pp.103-118.
- 名古屋大学総合言語センター日本語学科(編)(1983)“A Course in Modern Japanese vol.2”名古屋大学出版会.(=『CMJ』)
- 堀川智也(1988)「格助詞「二」の意味についての一試論」『東京大学言語学論集'88』, pp.321-333.
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店.
- 山梨正明(1994)「日常言語の認知格モデル6 意味のモード」『言語』第23巻第6号, pp.104-109.
- 李 欣怡(2002)『美しい国へ。 格助詞で終わる広告ヘッドラインの一考察』名古屋大学大学院修士学位論文.